謹賀新年

（公社）全国開拓振興協会
役職員一同

開拓情報

発行所
公益社団法人全国開拓振興協会
〒102-0093 東京都千代田区平河町１－２－10
TEL 03-6268-9995
FAX 03-6268-9996
ホームページ　https://www.kaitakusya.or.jp
全日本開拓者連盟・全開連・全国開拓振興協会共同編集

災いを防ぐ華麗な舞「花祭り」

新しい伝統が受け継がれていく

愛知県豊橋市・岩西開拓　御幸神社

新年1月4日、愛知県豊橋市の岩西開拓地にある御幸神社で、「花祭り」が開催された。コロナ禍で中止していたが、花祭り保存会などの熱意で、4年振りに開かれた。

「花祭り」は、稲穂に花が咲くようにと、五穀豊穣を祈る祭り。笛や太鼓のお囃子に合わせて、小中学生や、地元の人々が、滑らかな動きでありながら、時に勇壮な舞を披露した。

舞には「地固めの舞」・「花の舞」・「家内安全の舞」・「山見鬼」・「榊鬼」など多くの演目があり、夜中まで続いた。

花祭り保存会の井口定次会長は「花祭りは五穀豊穣を祈るだけではなく、地固めの舞とあるように、地震や、自然災害を防ぐための舞でもある。また、鬼は人々を襲うのではなく、災いから守ってくれる存在だと思う」と説明してくれた。

以前は男性だけに引き継がれていたが、女子児童たちが「私たちも踊りたい」と、女子による舞グループができ、伝統と改革が融合し、新たな伝統となって受け継がれている。

元来、花祭りは奥三河（天竜川水系の大入川流域の豊根村など）で数百年に亘る伝統の神事芸能だ。

上：境内にある公民館での小学生による盆の舞

下：鬼の首領である「榊鬼」。迫力ある舞に、後ろの子どもは恐がっている

地固めの舞（やち）：大地を踏みしめ、地震から守る

24年度補正予算成立
25年度予算閣議決定

《24年度補正予算成立》

24年度補正予算が12月17日、参院本会議で可決、成立した。

農林水産関係では、前年度比6・1％増の8678億円と、4年振りの増額となった。

これからの農業の指針ともなる食料・農業・農村基本計画の改定を3月末に控え、『新基本計画推進集中対策』として新たに3037億円が盛り込まれた。

このうち、「食料安全保障の強化に向けた構造転換対策」は同20・0％増の2537億円となった。水田の畑地化、麦・大豆等の作付け拡大などの「畑地化促進事業」に450億円、「不測時に備えた食料供給体制強化対策」に7億円、「合理的な価格の形成」に向けた調査・実証・理解醸成に6億円などとなっている。

また、「共同利用施設の再編集約・合理化」として、老朽化した施設再編などに400億円計上。

『物価高騰等の影響緩和対策』は同9・6％減の905億円となった。このうち、需要が低迷している和牛肉の販売促進として「和牛肉需要拡大緊急対策」が3倍強の170億円となった。

《25年度予算閣議決定》

政府は12月27日、25年度予算案を閣議決定した。農林水産関係予算は前年度比0・1％（20億円）増の2兆2706億円となった。24年度補正予算同様、基本計画を実行するための経費を盛り込み、わずかだが2年連続の増額となった。

『食料安全保障の強化』として、「水田活用の直接支払交付金」2870億円（前年度3015億円）、野菜・果樹等の生産基盤強化として「持続的生産強化対策事業」142億円（同148億円）、地域計画の実現やスマート農業技術の実践への支援などとして「共同利用施設の整備」200億円（同121億円）など。

『農業の持続的な発展』として、「地域計画実現総合対策」に384億円、「新規就農者育成総合対策」に107億円（同96億円）など。

『農村の振興（農村の活性化）』として、地域資源を活用した付加価値の創出や、中山間地域等の農用地保全に「農山漁村振興交付金」74億円（同84億円）など。

当予算案は1月の通常国会に提出され、3月末までの成立を目指す。

（畜産関係の概要は2面参照）

本紙は無償で提供しています。
ご希望の方はお知らせ下さい。

【岩西開拓】

同地は戦時中、軍の演習地で、戦後、豊根村からの移住者や軍人など170名が入植したが、強酸性の土壌だったため、開墾は進まなかった。

48年に岩西開拓農協が設立され、団結して苦難に立ち向かった。心の拠り所として御幸神社が建てられ、50年に故郷の「花祭り」が同地でも行われるようになった。

同じ頃豊根村周辺では、佐久間ダム及び新豊根ダムが建設され、豊根村のいくつかの集落が水没するので、津島神社から花祭りの祭具一式を譲り受け、伝統が受け継がれることとなった。

富士山の初夢を見られなかった皆様へ

一富士、二鷹、三茄子と、初夢に見ると縁起が良いとされるものの筆頭にそびえる富士山。

今年、富士山の初夢を見たという人はまれだと思われるので、1月号に掲載させていただくこととした。

この写真は、静岡県・富士開拓の開拓碑がある西富士霊園近くの牧草地からの様子。

今年は、新しい農業の基本計画が決定・実行される重要な年であり、また、戦後すなわち開拓80周年という節目の年。

今年は何としても、農家・農業にとって良い方に向かう年となってもらいたい。

食料・農業　知っておきたい話　第140回

いまだに国産が過剰と言い続ける愚かさ

これ以上酪農家、稲作農家に負担を押し付けてはならない

東京大学大学院特任教授・名誉教授　鈴木宣弘氏

お金を出せば、食料はいつでも安く輸入できる時代でなくなった一方、国内農家は減少速度を増している。国内生産は過剰ではなく、足りていないのだ。

今こそ、すべての農産物の国内生産の増大に全力を挙げて、国産で輸入を置き換えて輸入依存を減らすとともに、備蓄も増やして、不測の事態に子ども達の命を守れる準備を強化するのが、命を守る安全保障、「国防」だ。

それなのに、酪農戸数が一万戸を割り、今後の生乳供給が懸念される中で、増産対策の強化ではなく、生産調整に協力しないと補助金を出さない方向性が出てきた。

令和のコメ騒動が収まらない中で、来年のコメの需給見通しも出された。驚くべきことに、いまだにコメは余っているとして、さらなる減反の必要性を示した。どうして、このような認識の誤りを是正できないのだろうか。

☆酪農生産は足りていない～酪農家にしわ寄せし過ぎ

そもそも輸入依存度が高いということは、国産が足りていないということだ。酪農家の減少が加速しているのが問題になっている最中、脱脂粉乳の在庫が多いから生産抑制だ、協力せずに搾って系統外に売る酪農家には補助金を出さないようにしよう、という方向性が出ている。

発想の方向性が間違っている。今こそ、酪農家が自由に増産できるようにするのが不可欠だ。国内生産が多すぎるのではなくて、輸入が多すぎるのだ。他の国のように脱脂粉乳とバターの在庫を政府が持ち、需給状況に応じて、過剰時に買い入れ、国内外の援助にも活用し、不足時に放出すれば、わずかな民間在庫増加で、こんなに酪農家に負担を押し付ける必要などない。

酪農家のコストに見合う乳価に届いていない分は海外のように補てんして、これ以上の酪農家の減少を食い止めなくては、本当に子どもたちに牛乳が飲ませられなくなる。

輸入が8割を占めるチーズ向け生乳を増やす内外価格差補てんで、大幅に国産への置き換えができるが、それにかかる財政負担は、オスプレイ1機の購入代金が220億円とすれば、オスプレイ1機の半分を酪農家あるいはメーカーに補てんするだけでできる。

食料・農業・農村を守るのは国民の命を守る安全保障のコストだと認識すれば、それを渋って、農家を苦しめ、国民を苦しめる愚かさに一刻も早く気付いてほしい。

☆コメ騒動を受けても変わらぬ「コメ過剰論」の不思議

コメ騒動が深刻化する中、生産者が継続できるセーフティネット構築は議論せずに、相変わらず減産を要請している。猛暑が常態化して低品質米が増えていることは作況指数に反映されない。だから、生産量を10万t減らすと減らし過ぎになる。

一方、コメ需要は減るとの見通しには、安全保障上の需要が欠落している。91万t、消費の1・5ヵ月分で不測の事態では、国民の命は守れない。

小麦やトウモロコシの輸入が減るリスクも高まっている中、コメのパンや麺、コメの飼料を増やすのは国家戦略的な安全保障上のコメ需要で、貧困層増大の下でのフードバンクや子供食堂を通じたコメ支援も必要だ。それらを合わせたらコメ需要は莫大にあり、減反している場合ではない。

☆国家観なき歳出削減からの脱却～農と食と命守る政策実現に向けて

しかしながら、それと完全に逆行する事態がさらに判明した。最近、財政当局の農業予算に対する考え方が次のように示された。

1　農業予算が多すぎる
2　飼料米補助をやめよ
3　低米価に耐えられる構造転換
4　備蓄米を減らせ
5　食料自給率を重視するな

そこには、歳出削減しか念頭になく、現状認識、大局的見地の欠如が懸念される。1970年の段階で1兆円近くあり、防衛予算の2倍近くだった農水予算は、50年以上たった今も2兆円ほどで、国家予算比で12%近くから2%弱までに減らされてきた。10兆円規模に膨れ上がった防衛予算との格差は大きい。

軍事・食料・エネルギーが国家存立の3本柱ともいわれるが、中でも一番命に直結する安全保障（国防）の要は食料・農業だ。その予算が減らされ続け、かつ、世界的食料争奪戦の激化と国内農業の疲弊の深刻化の下で、まだ高水準だという認識は国家戦略の欠如だ。

海外からの穀物輸入も不安視される中、水田を水田として維持して飼料米も増産することが、安全保障上も不可欠との方針で進めてきた飼料米助成は、まさに国家戦略のはずだ。それを、2階に上げて梯子を外すように、金額が増えてきたから終了というだけの論理は破綻している。

また、規模拡大とコスト削減は必要だが、日本の土地条件では限界があることを無視した議論は空論だ。日本にも100haの稲作経営もあるが、水田が100ヵ所以上に分散し、規模拡大してもコストが下がらなくなる（稲作も20ha以上になると60kg当たり生産費が上昇し始める）。

中国は14億人の人口が1年半食べられるだけの食料備蓄に乗り出している。世界情勢悪化の中、1・5ヵ月分程度のコメ備蓄で、不測の事態に子どもたちの命を守れるわけがない。今こそ総力をあげて増産し備蓄も増やすのが不可欠なときに、備蓄を減らせという話がなぜ出てくるのか。

「いつでもお金を出せば安く輸入できる」時代が終わった今こそ、国民の食料は国内でまかなう「国消国産」、食料自給率の向上が不可欠で、投入すべき安全保障コストの最優先課題のはずなのに、食料自給率向上に予算をかけるのは非効率だ、輸入すればよい、という論理は、危機認識力と国民の命を守る視点の欠如だ。

そして、これらの考え方が25年ぶりに改定された食料・農業・農村基本法にも色濃く反映されていることが事態の深刻さを物語る。

24年度農水補正予算（畜産・酪農）の概要

24年度農林水産関係補正予算のうち、畜産・酪農関係の主な事業は次のとおり（下図参照）。

◎食料安全保障の強化に向けた構造転換対策

国内肥料資源の利用拡大・広域流通に向けた堆肥等の高品質化・ペレット化等に必要な施設整備等を支援する「国内肥料資源の利用拡大対策」に64億円。飼料作物の持続可能な生産・利用に向けた地域モデルの実証、飼料生産組織の体制強化等を支援する「国産飼料生産・利用拡大緊急対策」に133億円。長命性の高い牛群編成への転換や、その能力を発揮するための適切な飼養管理の普及促進等を支援する「乳用牛の長命連産性向上対策」に50億円。

◎物価高騰等の影響緩和対策

物価高騰に伴い、需要が低迷している状況を踏まえ、食肉事業者等が行う和牛肉の販売促進等を支援する「和牛肉需要拡大緊急対策」に170億円。

◎持続可能な成長に向けた農林水産施策の推進

脱脂粉乳の在庫低減や牛乳・乳製品の需要拡大を支援する「脱脂粉乳の在庫低減・需要拡大」に103億円（内数）。殺処分をした家畜等に対する手当金を支援する等の「家畜伝染病・家畜衛生対策」に91億円。

24年度の農水関係補正予算の主な事項（畜産・酪農）

・国内肥料資源の利用拡大対策 堆肥の高品質化、ペレット化等に必要な施設整備等		64億円
・国産飼料生産・利用拡大緊急対策 国産飼料の生産・利用拡大等		133億円
・乳用牛の長命連産性向上対策 長命連産性の高い牛群への転換を支援等		50億円
・和牛肉需要拡大緊急対策 和牛肉の需給改善、新規需要開拓等を支援		170億円
・畜産クラスター事業等 飼料等の生産基盤強化、新規就農への設備投資等		371億円
・国産チーズの競争力強化 酪農家の原料乳高品質化・コスト低減への取り組み等	（内数）	103億円
・脱脂粉乳の在庫低減・需要拡大 脱脂粉乳の在庫低減や需要拡大等を支援	（内数）	103億円
・家畜伝染病・家畜衛生対策 家畜伝染病、重要病害虫の侵入・まん延の防止		91億円

25年度農水予算案（畜産・酪農）の概要

25年度農林水産関係予算案のうち、畜産・酪農関係の主な事業は次のとおり。（　）内は24年度当初予算。

○畜産生産体制の強化

8億円（同額）。

遺伝子解析技術等を活用した家畜改良の推進、肉用牛の出荷月齢の早期化、和牛の信頼確保のための遺伝子型の検査、乳用牛の長命連産性向上に資する取り組み等を支援。

○畜産生産力・生産体制強化対策事業

7・74億円（7・78億円）

肉用牛・乳用牛・豚等の改良や、肉用牛の肥育期間の短縮、和牛の信頼確保のための遺伝子型の検査等へ支援。

○飼料生産基盤立脚型酪農・肉用牛産地支援

56億円の内数（―）

酪農・肉用牛経営者等が連携した有機飼料の生産拡大等の取り組み支援など。

○草地関連基盤整備（公共）

3331億円の内数（3326億円の内数）

草地に立脚した、畜産経営の展開に必要となる基盤整備等を推進。

○畜産・酪農経営安定対策

2303億円（2296億円）

牛マルキン、豚マルキン、加工原料乳生産者補給金等により、経営の安定を支援。

開拓組織の動き

2月に予定されている開拓組織の主な行事は次のとおり。

2月

7～8日　関東地区開拓営農推進協議会研修会（静岡）

13～14日　九州開拓連絡協議会研修会（鹿児島）

19日　全開連総務責任者会議（東京）

21日　肥後開拓農協枝肉共進会（熊本）

28～1日　全開連開拓豚部会九州支部研修会（佐賀）

25年度
畜産物価格

加工乳補給金等23銭上げ

黒毛和種子牛保証基準価格1万円上げ

農水省は12月25日、食料・農業・農村政策審議会畜産部会を開き、25年度の畜産物価格等について諮問し、答申を受けて決定した。

加工原料乳生産者補給金は1kg当たり17銭上げの9円09銭。集送乳調整金が同5銭上げの2円73銭となった。また、調整金は関連対策（alic事業）で1銭上げの8銭となり、合計で23銭上げの11円90銭となった。

畜産部会での委員の意見として、「牛舎の修繕等、本来は必要だが算定に含まれないコストの加味が必要」「1頭当たりの生産コストが103万円を超え、酪農家戸数が1万戸を割る状況。所得の確保に向け、引き続き取り組みが必要」などの更なる要望が出された。

肉用子牛生産者補給金の保証基準価格は、黒毛和種が1万円上げの57万4000円となり、乳用種と交雑種は据え置きとなった。

合理化目標価格は、黒毛和種が2000円上げの44万6000円となり、乳用種と交雑種は据え置きとなった。

畜産部会での委員の意見として、「生産費統計は様々なものに使用されているが、それらが実態に合っているのか、よく検討して欲しい」などの要望も出された。

2025年度　畜産物政策価格

加工原料乳生産者補給金単価、
集送乳調整金単価及び総交付対象数量

	2025年度	前年度比
生産者補給金	9.09円／kg	＋0.17円／kg
集送乳調整金	2.73円／kg	＋0.05円／kg
［関連対策 alic］	0.08円／kg	＋0.01円／kg
合計	11.90円／kg	＋0.23円／kg
総交付対象数量	325万ｔ	据え置き
［関連対策 alic］	18万ｔ	据え置き
合計	343万ｔ	据え置き

肉用子牛の保証基準価格及び
合理化目標価格　（円／頭）

		2025年度	前年度比
保証基準価格	黒毛和種	574,000	＋10,000
	褐毛和種	523,000	＋9,000
	その他の肉専用種	334,000	＋6,000
	乳用種	164,000	据え置き
	交雑種	274,000	据え置き
合理化目標価格	黒毛和種	446,000	＋2,000
	褐毛和種	406,000	＋2,000
	その他の肉専用種	259,000	＋1,000
	乳用種	110,000	据え置き
	交雑種	216,000	据え置き

肉用子牛に1万円／頭上乗せ

和子牛産地基盤強化緊急特別対策事業

農水省は12月27日、和子牛産地の基盤強化につながる取り組みに奨励金を交付する「和子牛産地基盤強化緊急特別対策事業（以下、特別対策）」を25年度に実施することを公表した。

特別対策は、ブロック別平均売買価格が発動基準（黒毛和種は最大61万円）を下回った場合に、取り組みに応じて最大3万円／頭を定額で交付する「優良和子牛生産推進緊急支援事業（以下、緊急事業）」に上乗せする形で交付される。実施は25年度限りとなる。

特別対策の発動基準は、黒毛和種が61万円、褐毛和種が56万円、その他肉専用種が36万円に設定。基準を下回った際に、奨励金として1万円（離島の生産者は5万円）交付される。

交付を受けるには、表に記載の3つの必要取り組みの中からいずれか1つを行っている必要がある。なお、緊急事業の交付対象は販売された子牛が対象となっていたが、特別対策では自家保留牛も対象となる。

表　25年度和子牛産地基盤強化緊急特別対策事業

品種区分	発動基準	発動額	
		離島等以外	離島等
黒毛和種	61万円	1万円	5万円
褐毛和種	56万円		
その他肉専	36万円		
必要取り組み	各和子牛産地で下の内容を含む基盤強化計画を作成。下の取り組みのいずれか1つを行う生産者に対し、奨励金を交付。 ①地域内自給飼料の生産・利用 ②早期出荷に向けた地域内一貫生産 ③需給に応じた生産（子牛や枝肉の需給・価格状況、消費者ニーズに関する勉強会等の実施）		

肉牛は価格低下で減少

23年農業総産出額（畜産）

農水省は12月24日、「23年農業総産出額及び生産農業所得（全国、都道府県別）」を公表した。23年の畜産総産出額は3・7兆円で、昨年に続き過去最高額となった。

【肉用牛】

生産基盤の強化が推進され、和牛改良の進展や飼養管理技術の向上などで、高品質な牛肉の割合が増加してきている。牛肉の輸出も増加傾向で推移してきたが、23年は前年より561億円（6・8％）減少し、7696億円となった。

和牛と交雑種の出荷頭数は引き続き増加しているが、和牛肉の需要が軟調に推移し価格が低下したことなどが影響しているとしている。

【生乳】

生産基盤強化の進展を背景に、生乳生産量は18年以降増加傾向で推移してきたが、23年は減少に転じた。しかし、23年の産出額は、前年より394億円（5・0％）増加し、8310億円となった。

夏場の猛暑に加え、需給バランスの改善に向けた生産抑制で生産量が減少したものの、飲用等向け及び乳製品向け乳価が引き上げられたことなどが要因としている。

【豚】

飼養管理技術の向上などで豚の出荷頭数は増加傾向で推移しているが、巣ごもりや節約志向の高まりによる需要増加で豚肉価格は堅調に推移しており、近年、豚の産出額は6000億円台で推移してきた。

23年は、前年に比べ481億円（7・2％）増加し、7194億円となった。出荷頭数は前年を下回ったものの、引き続き需要が高く、価格が堅調に推移したことなどが寄与したとしている。

なお、各品目の産出額上位県を見ると、北海道が生乳と肉用牛、鹿児島県が豚で首位となっている。肉用牛の産出額で北海道が首位になるのは、統計開始以降初めてのことである。

（野菜等の産出額は6面）

表　農業総産出額等の推移　（億円）

	2020	2021	2022	2023
農業総産出額	89,369	88,380	90,010	94,991
	0.5%	△1.1%	1.8%	5.5%
肉用牛	7,385	8,232	8,257	7,696
	△6.3%	11.5%	0.3%	△6.8%
生乳	7,797	7,861	7,916	8,310
	2.2%	0.8%	0.7%	5.0%
豚	6,619	6,360	6,713	7,194
	9.2%	△3.9%	5.6%	7.2%
生産農業所得	33,433	33,478	31,050	32,930
	0.7%	0.1%	△7.3%	6.1%

上段：実額、下段：対前年増減率、△はマイナス
（農水省の資料を基に作成）

開拓の碑（いしぶみ）

県有数の畜産団地に発展

福島県相馬市・副霊山開拓

福島県相馬市の副霊山（ふくりょうざん）開拓は、県北東部の宮城県との県境に位置する。

標高500～600mの山間部で、冬には30～40cm程の積雪となる。

先遣隊が、西側にあった伊達郡霊山村（現霊山町）から、山越えして同地に入植したのが46年。それから満州や樺太などからの引き揚げ者など122名が入植した。48年には副霊山開拓農業協同組合が設立された。

入植当初は、自分たちが食べる物から作付し、ダイコン、ジャガイモなど、季節ごとに生産した。

53年から2年続けて大冷害に見舞われ、主要農産物の収穫が皆無となってしまった。そのため、道路建設や、営林署の払下げの薪炭（しんたん）事業でなんとか生活苦を切り抜けた。

山間地という立地条件を考慮した上で、主穀物生産体制から主畜生産体制に切り替わり、54年に乳牛21頭が導入された。

数名が北海道に一年間研修に行き、戻ってからは指導員として酪農指導に当たるということが、3期ほど続いた。開拓者全員が一致団結して取り組んだ結果、57年5月、ついに牛乳の初出荷が実現した。一時期は、農家全戸が酪農を営むというまとまりをみせた。

67年には副霊山ブロイラー組合が発足、開拓組合、食品工場の三者契約で養鶏事業も軌道に乗った。酪農と共に努力し合い、県下に誇る畜産団地に発展していった。

また、高冷地の特色を活かした、種ジャガイモ、種タマネギなどの採種ほ場の拡張も推進した。

96年に開拓50周年記念碑が建てられ、高冷地農業の悪条件を乗り越えての繁栄を讃えた。

この地域は、11年の福島原発事故の際も避難区域に当たらず、現在も多くの農家が営農を続けている。

親子3代引き継ぐ 循環型農業
地域の農業みんなで守る

前月号で紹介した㈱イソシンファームの平久江（ひらくえ）利実（さとみ）社長の発表が、24年度全国優良畜産経営管理技術発表会で優秀賞を受賞した。「祖父から孫へ、『愛』のバトンリレー―地域に根差した耕畜連携・循環型農業の実現―」と題して行われた発表の内容を紹介する。

★離農農家からの農地を引き受け

現在、㈱イソシンファームは交雑種・ホルスタイン種を中心に950頭を飼養しており、WCS用を中心とした水稲、アスパラガスとの複合経営を、利実社長と母・由美子さん、祖父・進さんの3世代で協力して行っている。

初代社長である進さんはオイルショック当時に資材価格の高騰に苦しんだことをきっかけに、自給飼料を中心とした経営へと切り替えていった。利実さんもその理念を受け継ぎ、地域の離農農家等から申し出があれば、これを積極的に引き受けるなどして粗飼料生産に取り組んできたところ、現在では粗飼料自給率約95％の経営を実現。

また、開拓牛（乳用去勢牛）の配合飼料は20％を、利実社長が生産したものも含め、栃木県内で生産された飼料用米に置き換えており、新たな取り組みにも挑戦し続けている。

★循環型農業の実践

自家製堆肥は、地域の耕種農家34戸との耕畜連携により、稲わらと交換しているほか、近隣の果樹農家など、希望する全ての人に提供している。

アスパラガスも、堆肥の有効利用の一貫として06年から生産を始めた。

★安心安全な牛肉生産

牛肉は、生活協同組合へ「栃木開拓牛（ホルスタイン雄）」、「ほうきね牛（交雑）」として販売している。この素牛は、近隣の那須篭根酪農協の開拓酪農場のほか、提携農家で生まれた子牛を導入・肥育したもので、栃木県開拓農協と那須篭根酪農協が連携して地域内乳肉一貫生産を実現している。

★地域農業の維持を一番に

利実社長は「地域からの依頼は断らない」を経営のモットーとして歩んできた。地域の農業を維持していくことを一番に考えた結果、飼料畑面積は当初の8倍に拡がり、また、ドローンで農薬散布を行うことにより、作業時間を従来の3分の1に短縮するなどして経営規模を拡大しつつ、その維持にも努めている。

最後に利実社長は「食物を作る過程への関心はまだ低いと感じている。来るもの拒まずの姿勢で、農業に興味のある人を誰でも受け入れ、農業を学べる場としての役割を担っていきたい」と意気込みを語った。

水稲 「両正条植え」で縦横の除草可能
24年農業10大ニュース

農水省は12月20日、「24年農業技術10大ニュース」を発表した。1年間に新聞記事で注目を集めた、大学や公立試験研究機関・国立研究開発法人などの研究成果のうち、内容が優れ社会的関心が高いと考えられる成果10課題を農業技術クラブ（本紙を含む農業関係専門紙など30社が加盟）による投票で選定したもの。選ばれた10大ニュースは次のとおり。

①「両正条植え」で縦横の機械除草が可能に！―省力的な機械除草が有機栽培の拡大に貢献（農研機構）

②「アイガモロボ」でらくらく除草―水稲の有機栽培で除草回数を約6割削減、収量を約1割増加（農研機構、東京農工大学等）

③スラリと直立！りんご新品種「紅つるぎ」を開発―りんご栽培における管理作業を省力化（農研機構）

④国内初！農業特化型の生成AIを開発―三重県で実証実験開始　将来的には全国規模で農業情報を提供（農研機構、北海道大学等）

⑤餌探しをあきらめないタイリクヒメハナカメムシ―行動特性を生かした天敵昆虫の育成（農研機構）＝**本紙791号（3月号）で紹介**

⑥多収大豆品種「そらみずき」「そらみのり」を開発―国産大豆の安定供給や自給率向上に貢献（農研機構）

⑦ズバッと計算！酪農家向けの飼料設計支援プログラムを開発―最も低コストな飼料メニューと飼料作物の作付け計画を提案＝**本紙796号（8月号）で紹介**

⑧「ハウスにテグス君」でカラス被害9割減―安価な資材で簡単施工（農研機構）＝**本紙790号（2月号）で紹介**

⑨霜やひょうをピンポイントで予測！高精度の気象予測システムを開発―気象リスクをタイムリーにアラート通知（㈱ウエザーニューズ）

⑩「アニマルック」が実現する家畜遠隔診療の新たな形―診療予約管理、診察履歴管理、ビデオ通話による診療等を一括管理（SBテクノロジー㈱）

石田さんのおいしい！畜産全開レシピ

今月号から、全開連職員で管理栄養士の資格を持つ「石田さん」による国産の農畜産物を使ったおいしいレシピを紹介する。

～おうちで堪能！絶品 5 開拓交雑種牛ステーキ～

☆材料（2人分）
- 牛肉　200g程度のステーキ用肉を2枚
- 塩　少々
- こしょう　少々
- オリーブ油　小さじ
- バター　小さじ5
- ワイン　大さじ1

〈バターソース〉
- バター　20g
- レモン汁　4g
- パセリ　0・6g

☆作り方

①肉は焼く30分前に冷蔵庫から出し、室温に戻しておく

②バターソースは、バターをクリーム状に練り、レモン汁とパセリのみじん切りを練りまぜ、ラップで棒状に巻き、冷蔵庫で冷やしておく

③牛肉は、筋切りをしておく。焼く直前に肉の両面に塩・こしょうをふる

④フライパンを中火にかけて十分に熱し、オリーブ油とバターを入れる。上面になる方の肉を下にして強火で約30秒焼き、弱火にして肉を動かしながら1分間焼く。肉の周りが灰色に変わり、赤い肉汁が表面ににじみ出てきたら、強火にして肉を裏返した時、ワインを入れ、上面同様に、強火30秒、弱火1分で焼き上げる

⑤皿に肉を盛り付ける。好みの付け合わせ（クレソン、レモン）を添える。②のバターソースを輪切りにして肉に乗せる

～リーフレタスとクレソンとモッツァレラチーズのサラダ～

☆材料（2人分）
- リーフレタス　2枚
- ミニトマト　4個
- クレソン　1／2束
- モッツァレラチーズ　6個（ひと口タイプ）
- お好みのナッツ（アーモンドやマカダミアナッツ等）
- ドレッシング（お好みのもの）　適量

☆作り方

①リーフレタスは食べやすい大きさにちぎる。クレソンは食べやすい長さに切る。ミニトマトは半分に切る

②ナッツを袋に入れ、めん棒でくだく

③器に①とモッツァレラチーズを盛りつけ、②を散らし、ドレッシングをかける

★牛肉の栄養素

・たんぱく質→たんぱく質は、筋肉や血、髪、爪など私たちの体を作るのに役立ちます。特に肉のたんぱく質は良質です！（体で作ることができない必須アミノ酸をバランス良く含むためです）

・鉄→鉄は貧血を予防します。

赤身肉は鉄分を多く含んでいます。ヒレやモモなど脂身の少ない部位は含有量が多いです！

★肉料理とクレソン

・クレソンはピリッとした辛味や苦みがあるのが特徴で、ステーキなどの肉料理の付け合わせによく使われます。

クレソンに含まれる辛味成分は食欲を増進させる作用があり、ボリュームのある肉料理と相性が良いです。

★野菜について

・野菜はビタミンを多く含みます。ビタミンは骨や皮膚、粘膜などを丈夫にし、体の調子を整え、感染症にかかりにくくするなどの働きがあります！

色が濃い野菜は緑黄色野菜に分類され、より多くのビタミンを含みます。（今回のサラダはトマト、クレソンが緑黄色野菜です）

風邪が流行っている季節なので、免疫力アップのため、メインのおかずに野菜を使った簡単な料理などを加えると良いでしょう！

農場「分割管理」でリスク分散

疾病発生後も農場守る

畜産は経営開始時に莫大な初期投資が必要となるため、一旦停止すると再開することが非常に難しい。豚熱などの疾病が発生した場合でも農場を維持するために、農水省では農場の「分割管理」を推奨している。「農場の分割管理に当たっての対応マニュアル」から、分割管理の内容を紹介する。

◎人・モノを分け「別農場扱い」に

養豚農場は、母豚舎・分娩舎・離乳舎・肥育舎間で豚の移動があり、農場ごとに管理方法が異なることから、「繁殖・離乳と肥育で分離」や「離乳のみ分離」などして、農場の実情に合わせた分割方法を検討することが重要となる。

◎衛生管理区域ごとに「１農場」

分割する区域が決定したら、区域ごとに「衛生管理区域」を設定。分割した畜舎同士の境界には柵やフェンスを設置するなど、境界を明確化する。衛生管理区域ごとに、「１農場」の扱いとなる。分割した農場ごとに専用の出入口を設け、手指消毒や衣服・靴の交換を行う更衣室、車両の出入りの時の消毒設備など、人やモノの出入りに必要な設備を各々設置し、「別農場扱い」とする。分割管理のイメージは図のとおり。

人・モノなどの動線を分けて衛生管理を行うことで、特定家畜伝染病が発生しても、非発生農場は殺処分などの対象外とすることができる。

◎農場間で豚を移動させる場合

豚の移動に移動通路やケージなどを使う場合は、移動の前後で洗浄・消毒などを行い、豚の移動時以外は境界部分は扉・ゲートで閉めておく。また、移動時に農場ごとの作業者が交差しないよう作業を行う。

◎導入家畜は指定の期間隔離、患畜が出ても別農場は出荷できる場合も

家畜の導入の際には、防疫指針で定められた「病性等判定日から遡る日数」に基づき、日数が最長の豚熱に合わせて10日以上、飼養している家畜から隔離し、感染していた場合のまん延を防ぐ。

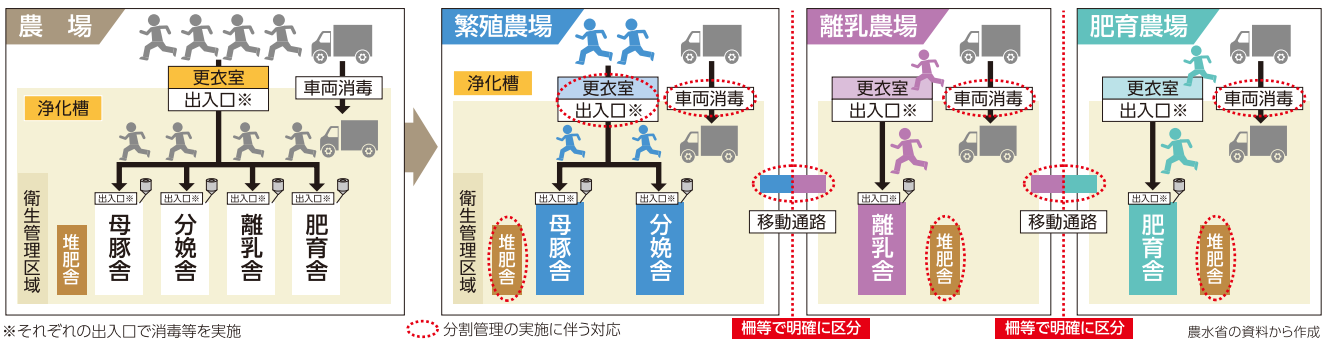
また、家畜が疾病を発症した場合には、患畜発生農場と同一の管理者が複数の農場の飼養管理者になっている場合でも、「対象疾病感染が否定されている」「発生時の立ち入り検査の際に飼養衛生管理基準の遵守が確認されている」などの一定の条件を満たす場合には、疑似患畜から除外される場合がある。患畜が発生した際には、所管の家畜保健衛生所などに対応を相談する。

◎要望調査でより良い管理方法に

25年４月からは、各県を通じて、農協・生産者に要望調査が行われる。疾病が発生しても経営を諦めずに続けられる取り組みにしたい。

養豚農場で分割管理を行う場合のイメージ

区分する単位は、繁殖と離乳は一体とする、肥育のみを複数に分ける、複数の一貫に分けるなど、農場の実情に合わせた検討が可能。



農水省の資料から作成

返済困難分の借り換えに

畜産リノベ資金

円安等によるコスト増加などにより、畜産経営を取り巻く環境は非常に厳しい状況にある。（公社）中央畜産会が、経営改善指導とセットで借換資金を融資する「畜産リノベ資金（旧畜産特別資金）」を紹介する。

□借入金は長期・低利の返済

畜産経営に係る借入金のうち、毎年の返済金額の不足分を限度額として、長期・低利で借り換えることができる。期限は、酪農・肉用牛経営は25年以内（据置期間５年以内）、養豚経営は15年以内（同５年以内）。金利は1.4%（24年12月18日現在）となっている。

貸付けは原則として５月31日と11月30日だが、状況に応じて別途相談もできる。

□新規投資と併用可能な場合も

借り換えを行うと、個々の経営課題に対し、畜産協会・行政機関などで構成する「支援協議会」の指導を受けて経営改善に取り組むこととなる。また、同資金の借入を行っていても、支援協議会で真に経営改善に必要と判断される機械・施設などの新たな投資については認められる場合もある。

借入の検討に当たっては、地域の農協、自治体等に相談を。

（公社）中央畜産会の資料から

20代の５割以上が農業に興味

将来的なセカンドキャリア念頭に

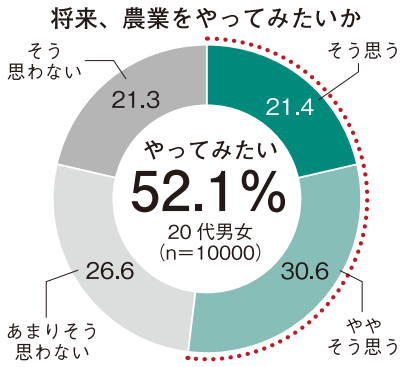
全国共済農業協同組合連合会は12月11日、「20代の農業に関する意識と実態調査」結果を公表した。

◆調査結果①：全国の20代の男女１万人に「将来、農業をやってみたいか」質問したところ、回答は図のとおり。52.1%の人がやってみたいと回答した。

◆調査結果②：農業をやってみたい20代の男女700人（大学生200人と会社等で働くビジネスパーソン500人）に質問したところ、「農業に従事するのに必要な力」は「体力」61.9%、「忍耐力」46.4%、「計画力」が44.0%の順で高かった。そのうち、「現在の自分に足りていない力」は、「体力」が33.4%、「経営力」が29.6%、「判断力」が24.1%の順で高かった。

「すぐに農業を始めない理由」は、

将来、農業をやってみたいか



「最初は安定した収入を得たいと思ったから」が52.9%、「いきなり農業を始める勇気がなかったから」が43.9%、「普通に就活して就職してみたいと思ったから」が39.0%の順で高かった。

「今後農業を始めるために準備をしていること」は、「農業に関する情報収集」が32.7%、「資金を貯めている」が30.4%、「農業をしている人などから話を聞く」が28.6%の順で高かった。

人手不足傾向続く

24年酪農ヘルパー調査

（一社）酪農ヘルパー全国協会は12月２日、24年の「酪農ヘルパーの利用実態（速報）」を公表した。ヘルパー要員数は前回調査から引き続き減少しており、担い手ヘルパーの確保が課題となっている。

24年８月１日現在の酪農ヘルパー要員は全国で1454人（前年比38人減）。うち、専任ヘルパーは843人（54人減）、臨時ヘルパーは611人（16人増）。女性の専任ヘルパーは123人（４人増）で、北海道は69人（３人増）、都府県は54人（１人増）だった。

全国の酪農ヘルパー利用組合数は257組合（北海道85組合、都府県172組合）で、前年から２組合減少。利用組合参加戸数は北海道が215戸減、都府県が337戸減の8291戸（１利用組合当たり32.9戸）。

23年度の利用農家１戸当たりの年間利用日数は全国平均で24.93日（前年度比0.97日増）。北海道が24.80日（0.55日増）、都府県が25.04日（1.31日増）利用している。

年間12日以上利用した農家は、利用農家全体のうち68.5%（前年度比1.3ポイント増）。北海道は61.6%（0.7ポイント増）、都府県は74.5%（2.0ポイント増）となっている。

需要量 ニンジンやトマトなど多種増加

25年度 夏秋野菜等の需給ガイドライン

農水省が12月に公表した「25年度夏秋野菜等の需給ガイドライン」によると、多くの品目で23年実績より需要量の増加が見込まれている。

同ガイドラインは、野菜価格安定制度の登録生産者や登録出荷団体が、夏秋野菜などの供給計画を作成する際の目安として、年２回、次期作の需要量、供給量、作付面積に関して作成している。25年６月から26年３月までに出荷される夏秋野菜等12品目について推計している。

〈需要量〉

過去10年間の１人当たり需要量（純食料ベース＝野菜の芯などの通常食さない部分を除いた量）の推移から、１人当たり需要量を推計し、これに当該年次の推計人口を乗じ、実績の需給バランスも考慮して表のように見込んだ。

23年実績より増加が見込まれるのは９品目で、秋ニンジンが6.5%増、大玉トマトが4.7%増、ミニトマトと秋冬ネギがともに4.0%増などとなっている。減少が見込まれるのは３品目で、夏秋レタスが3.4%減、夏秋ナスが0.8%減、夏秋キュウリが0.5%減となっている。

〈国内産供給量〉

国内産供給量は、供給量（輸入量含む）を基に、輸入動向を勘案して推計。23年実績より増加が見込まれるのは８品目で、秋ニンジンが11.3%増秋冬ネギが4.8%増、夏秋ピーマンと大玉トマトが4.6%増などとなっている。減少が見込まれるのは４品目で、夏秋レタスが4.0%減、夏秋キャベツが1.5%減などとなっている。

〈作付面積〉

作付面積は、国内産供給量を過去10年の単収の推移から推計した単収で割り算することで算出。全国の作付面積の指標となる。24年度ガイドラインに比べ、夏秋ピーマンをはじめとした６品目が増加または増減なしとした一方、秋冬サトイモなど６品目は減少している。

2025年度需給ガイドライン

（ﾄﾝ、ha、%）

種別	需要量（純食料）			国内産供給量			作付面積		
		23年実績	23年比		23年実績	23年比		24年度ガイドライン	24年比
夏秋キャベツ	339,000	334,478	101.4	475,700	482,800	98.5	9,700	9,700	100.0
夏秋キュウリ	241,300	242,394	99.5	255,300	257,200	99.3	7,190	7,190	100.0
秋冬サトイモ	130,000	126,081	103.1	130,000	126,600	102.7	9,600	10,100	95.0
夏ダイコン	176,900	173,050	102.2	205,200	200,300	102.4	5,200	5,290	98.3
夏秋トマト	242,200	231,696	104.5	288,200	275,900	104.5	6,940	6,950	99.9
うち大玉トマト	195,200	186,515	104.7	232,300	222,100	104.6	5,420	5,420	100.0
うちミニトマト	47,000	45,181	104.0	55,900	53,800	103.9	1,520	1,530	99.3
夏秋ナス	149,800	151,049	99.2	172,500	174,000	99.1	6,690	6,920	96.7
秋ニンジン	242,500	227,648	106.5	187,500	168,500	111.3	5,020	5,120	98.0
秋冬ネギ	195,400	187,847	104.0	266,800	254,700	104.8	13,600	13,600	100.0
夏ハクサイ	128,800	127,699	100.9	160,800	159,700	100.7	2,240	2,320	96.6
夏秋ピーマン	63,500	62,329	101.9	68,600	65,600	104.6	2,260	2,220	101.8
夏秋レタス	202,100	209,263	96.6	247,600	258,000	96.0	8,110	8,050	100.7

（農水省の資料を基に作成）

茶減少も米・イモ・野菜・果実は増加

23年農業総産出額（野菜等）

農水省は12月24日に「23年農業総産出額及び生産農業所得（全国、都道府県別）」を公表した。

統計によると、農業総産出額は、耕種では米や野菜、畜産では鶏卵の価格が上昇したことなどから、前年に比べ4981億円（5.5%）増加し、９兆4991億円となった。また、生産農業所得は、農産物の価格が上昇したことなどから、前年より1880億円（6.1%）増加し、３兆2930億円となった。

ここでは、米、イモ類、野菜、果実、茶の５品目の産出額について紹介する。

【米】

国内の人口減少や多様化する消費者ニーズなどを背景に、主食用米の需要減少が進む中、20年以降、主食用米の取引価格は軟調に推移してきた。米の産出額は減少傾向で推移してきたが、主食用米の価格が回復したことなどから22年は増加した。

23年は、前年より1247億円（8.9%）増加し、１兆5193億円となった。これは、23年産米の需要が堅調に推移したことなどから民間在庫量が減少し、主食用米の取引価格が上昇したことなどが要因とみられる。

【イモ類】

バレイショとカンショの作付面積は減少傾向で推移している。一方、バレイショにおいてポテトチップ用など加工食品向けに国産品を求めるニーズが高まっていることや、カンショは国内外の焼き芋などの堅調な需要により、20年以降、イモ類の産出額は2000億円を超えて推移してきた。

23年は、前年より102億円（4.6%）増加し、2301億円となった。これは、カンショにおいて需給緩和により価格が低下したが、バレイショで主産地の天候に恵まれたことから、生産量が増加したことなどが寄与したものと考えられる。

【野菜】

18年以降、野菜の産出額は２兆2000億円前後で推移してきた。

23年は、前年より949億円（4.3%）増加し、２兆3243億円となった。これは、キュウリ、ピーマン、ネギ等の品目で８月から９月にかけて高温少雨の影響などから生産量が減少し、価格が上昇したことなどが要因とみられる。

【果実】

優良品種・品目への転換などにより、消費者ニーズに合った高品質な品目が生産されるようになり、国内外での堅調なニーズに支えられ価格は上昇傾向にある。それに伴い、20年以降、果実の産出額は増加傾向で推移している。

23年は、前年より361億円（3.9%）増加し9593億円となった。これは、夏の高温による生産量の減少（リンゴ・ミカン）により価格が上昇したこと、高単価品種の生産量が増加したことなどが考えられる。

【茶】

生産者の高齢化・減少などを背景に栽培面積が減少傾向で推移しており、18年以降、茶の産出額は減少傾向で推移してきた。

23年は、前年より28億円（5.9%）減少し443億円だった。これは、栽培面積の減少や、一番茶で４月下旬から５月上旬の低温により生育が伸び悩み、収穫量が減少したことなどが影響したとみられる。

農業総産出額等の推移

（億円）

	2020	2021	2022	2023
農業総産出額	89,369	88,380	90,010	94,991
	0.5	△ 1.1	1.8	5.5
米	16,431	13,699	13,946	15,193
	△ 5.7	△16.6	1.8	8.9
イモ類	2,370	2,358	2,199	2,301
	19.0	△ 0.5	△ 6.7	4.6
野菜	22,519	21,463	22,294	23,243
	4.7	△ 4.7	3.9	4.3
果実	8,741	9,159	9,232	9,593
	4.1	4.8	0.8	3.9
茶	409	495	471	443
	△21.6	21.0	△ 4.8	△ 5.9
生産農業所得	33,433	33,478	31,050	32,930
	0.7	0.1	△ 7.3	6.1

上段：実額、下段：対前年増減率、△はマイナス。　（農水省の資料を基に作成）

イチゴ生果実輸出解禁

フィリピン向けに

農水省は、12月15日付でフィリピンへのイチゴ生果実の輸出が解禁されたことを公表した。

フィリピンは、日本産イチゴ生果実については、オウトウショウジョウバエなどの病害虫が日本で発生していることを理由に、これまで輸入を禁止してきた。

同省は、イチゴ生果実の輸出が可能となるように、フィリピン検疫当局と協議し、輸出に係る検疫条件について合意に達した。病害虫の発生調査などの、主に４つの検疫条件を満たすことで同国へのイチゴ輸出が既に可能となっている。

23年 肉牛・牛乳・豚生産費
乳用と交雑種は減少も他畜種は増加
素畜費減少の影響大きく

農水省は12月24日、「23年肉用牛生産費」「23年牛乳生産費」「23年肥育豚生産費」を公表した。

それによると、子牛と去勢若齢肥育牛（ともに肉専用種）、牛乳、肥育豚で生産費が増加した。全体的に飼料費の増加が目立っており、依然として生産者の大きな負担となっている。

○乳用雄肥育牛○

全算入生産費（１頭当たり）は59万8641円（前年比3.3%減）となった。物財費のうち、飼料費は30万3780円（5.9%増）と増加しているが、素畜費は22万9570円（14.0%減）と大幅に減少したことが影響している。

１頭当たり販売価格（販売時月齢19.0ヵ月、前年比1.6%減）は、50万6344円（2.1%増）と値上がりした。１経営体当たり販売頭数は222.2頭（12.8%増）と増加している。

○交雑種肥育牛○

全算入生産費は85万425円（1.3%減）だった。物財費のうち、飼料費は41万4234円（4.9%増）と増加しているが、素畜費は35万4931円（8.1%減）と減少したことが影響している。

１頭当たり販売価格（25.9ヵ月、0.4%増）は、74万4069円（3.3%減）と大幅に値下がりした。１経営体当たり販売頭数は152.4頭（9.3%増）と大きく増加した。

○子牛（肉専用種）○

全算入生産費は86万4024円（6.3%増）となった。飼料費が34万8485円（9.1%増）など、物財費が全体的に増加したことが影響している。

１頭当たり販売価格（9.4ヵ月齢、1.1%増）は、54万1399円（14.2%減）と大きく値下がりした。

○去勢若齢肥育牛（肉専用種）○

全算入生産費は、146万8063円（4.1%増）となった。素畜費が80万608円（2.5%増）と増加したうえ、飼料費が48万8726円（8.0%増）と増えたことなどによる。

１頭当たり販売価格（29.8ヵ月齢、1.0%増）は、130万2077円（2.5%減）と値下がりした。１経営体当たり販売頭数は40.7頭（3.0%増）と増加した。

○搾乳牛○

全算入生産費は103万2548円で、前年より2.3%増加した。物財費の内訳を見ると、飼料費が6.0%増などと増えており、費用合計は109万2667円（1.3%増）だった。スモールの価格は８万772円（13.3%減）と大きく値下がりしている。

○肥育豚生産費○

全算入生産費は４万5816円で前年より5.2%増加した。物財費のうち、飼料費が３万869円で5.3%増などと生産者の負担が増えている。１頭当たり販売価格は４万2814円で6.5%の増加となった。

2023年　肉用牛・生乳・肥育豚生産費（１頭当たり）

（円、%）

区分	乳用雄肥育牛		交雑種肥育牛		肉専用種				搾乳牛		肥育豚	
					子牛		去勢若齢肥育牛					
	金額	前年比	金額	前年比	金額	前年比	金額	前年比	金額	前年比	金額	前年比
物財費	579,368	△ 2.9	816,527	△ 1.4	577,084	7.9	1,373,736	4.2	928,426	1.6	40,461	5.0
うち素畜費	229,570	△14.0	354,931	△ 8.1			800,608	2.5				
うち飼料費	303,780	5.9	414,234	4.9	348,485	9.1	488,726	8.0	570,831	6.0	30,869	5.3
うち光熱水料費	10,899	11.3	10,174	△ 1.9	16,646	7.8	16,129	1.6	36,872	△ 0.9	2,031	△ 2.4
うち敷料費	18,670	17.3	11,837	9.0	10,548	13.9	12,229	△10.0	13,486	△ 2.1	143	△10.1
労働費	19,990	△ 9.5	35,401	6.2	214,785	5.5	88,781	4.4	164,241	△ 0.1	5,422	6.9
費用合計	599,358	△ 3.2	851,928	△ 1.1	791,869	7.2	1,462,517	4.2	1,092,667	1.3	45,883	5.2
生産費（副産物価額差引）	593,206	△ 3.2	840,281	△ 1.2	757,771	7.1	1,451,220	4.2	991,139	2.8	44,945	5.3
全算入生産費	598,641	△ 3.3	850,425	△ 1.3	864,024	6.3	1,468,063	4.1	1,032,548	2.3	45,816	5.2

農水省の資料から作成

乳去の減少続き和牛も減少に転じるか
交雑は増減なしと予想
25年 肉牛出荷予測頭数

肉牛出荷頭数の増減は、枝肉相場を左右する大きな要素となる。（独）家畜改良センターの「牛個体識別情報月齢別飼養頭数（24年11月末時点）」（以下、個体識別記録）などを基に、今年の品種別出荷頭数を予測した。

〈乳去勢〉

乳去勢の年間出荷予測頭数は約10万7500頭で、前年に比べ16.8%の減少を見込む。個体識別記録によると、総飼養頭数は17万6563頭と、加速度的に減少が続いている。

月別の出荷予測は、１～３月が平均約9000頭、４月が大型連休前であることを考慮し約9900頭を見込む。７月は約9000頭を見込み、その後は8500頭前後で推移するとみられる。最需要期である11～12月だが、出荷時期に適した月齢の在庫頭数がかなり落ち込んでいることから、平均約8500頭前後になると予測する。

〈交雑種〉

交雑種の年間出荷予測頭数は、雌雄合計で約25万6100頭と、前年と同程度になると見込む。去勢が約13万4000頭で0.1%減、雌が12万2100頭で1.7%増とみられる。個体識別記録によると、総飼養頭数は54万9441頭と、前年より1.1%減少している。

月別の出荷予測頭数（去勢・雌合計）は、１～３月が平均約２万300頭、４月は大型連休前であることを考慮し約２万2400頭に達すると予測する。７月は約２万2000頭と見込む。その後は約２万1000頭前後で推移すると見込まれ、最需要期である11～12月は平均２万3600頭ほどと予測する。

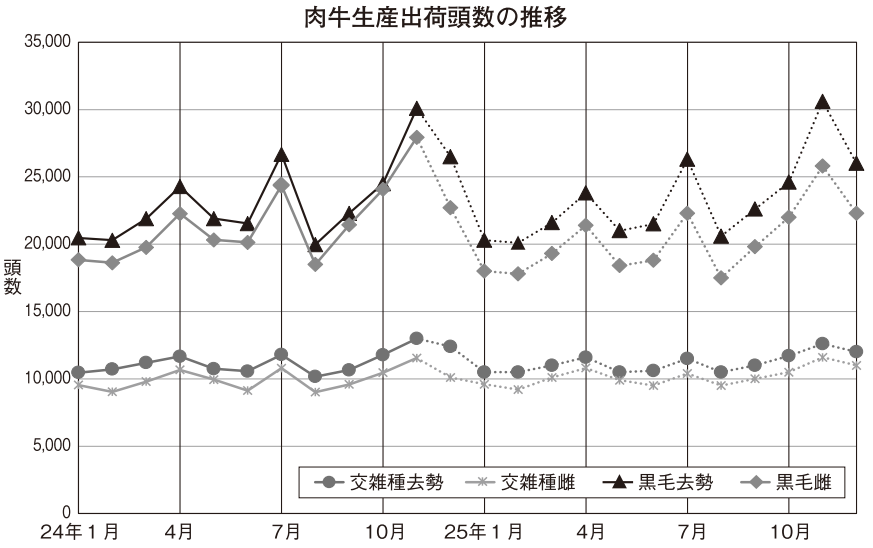
〈黒毛和種〉

黒毛和種の年間出荷予測頭数は、合計で約52万2400頭と、前年に比べ3.4%減少の見込み。去勢が約27万9000頭で0.4%減、雌が約24万3400頭で6.6%減とみられる。個体識別記録によると、総飼養頭数は174万3428頭と前年より1.6%減少している。

月別の出荷予測（去勢・雌合計）は、１～３月が平均３万9000頭、４月は約４万5000頭に達すると予測される。７月は約４万8600頭と見込まれる。その後は約４万2400頭前後で推移するとみられ、最需要期である11～12月は平均約５万2300頭と予測する。

なお、出荷月齢は、乳去勢は20ヵ月齢、交雑去勢及び雌は26ヵ月齢、黒毛和種去勢は28ヵ月齢、黒毛和種雌は30ヵ月齢に設定して予測した。

肉牛生産出荷頭数の推移



※24年１月～11月は実績値、12月以降は予測値。
※（独）家畜改良センター「牛個体識別情報月齢別飼養頭数」のデータを基に予測。
※事故率はデータベース初登録から肥育期間を通じて、事故率がその都度削除されていると推定しカウントしない。

乳用種で発動継続
牛マルキン11月分

農畜産業振興機構は１月10日、肉用牛肥育経営安定交付金（牛マルキン）の交付金単価（24年11月分、概算払い）を公表した。

乳用種で標準的販売価格が標準的生産費を下回ったため、交付が行われる。肉専用種は14都道府県で発動した。交雑種での発動はなかった。

交付金単価（１頭当たり）は、乳用種は３万2900.6円（前月は３万5574.5円、概算払い）となっている。

前月分と比べ、乳用種は素畜費の増加などがあったものの、標準的販売価格も増加したため、交付金は減額となった。

イギリスの畜産紹介

海外研修事業
（公社）全国開拓振興協会

全国開拓振興協会は、コロナ禍等により中止している海外研修について、今年度は「イギリスの畜産・酪農について」と題したＤＶＤを制作した。日本と立地条件が似ているイギリスにおける牛肉市場の現状や、肥育農家・酪農家の経営の様子を紹介している。

《第１部：イギリスの市場と食肉専門商社の取り組み》

イギリスでの和牛や交雑種など、牛肉の市場動向などについて説明。

《第２部：F_1和牛肥育農家の紹介》

ホルスタイン等の乳雌に和牛の種を付けた交雑種の肥育が行われている。

《第３部：ロンドン近郊の酪農場》

ロンドン近郊で牛乳を自動販売機で販売している酪農家を紹介。

１月末までに、各会員に配布する。現在、YouTube で配信している。

ＵＲＬ＝　https://x.gd/RK3uc

交雑種の肥育。育成は放牧

ジャージー種を飼養する酪農場

お詫びと訂正

本紙前月（800）号８面の記事で、全国優良畜産経営管理技術発表会に、栃木県の㈱イソシンファームが開拓組織では30年振りに出場した、との記事を掲載いたしました。

しかし、30年振りというのは栃木県からでのことであり、全国的には多くの開拓者の方々が素晴らしい成績で受賞されておりました。

ここに、前月の記事を訂正させていただき、心よりお詫び申し上げます。本当に申し訳ございませんでした。

つきましては、改めて95年以降に受賞された方々を紹介させていただきます。いずれの方も当時の開拓情報にて紹介させていただいております。

1995年以降の開拓農家の受賞者

年度	受賞者	県名	畜種	タイトル	受賞種類
98年度	千葉正勝	岩手県	酪　農	草作り、牛作りで低コスト生産	優秀賞
99年度	川合省吾	岡山県	酪　農	自給飼料の高位生産利用による酪農安定経営の確立	優秀賞
02年度	長崎県開拓農協南部種豚組合「紅葉会」	長崎県	養　豚	雲仙うまか豚「紅葉」小さな養豚集団が成し遂げた地場消費の拡大と銘柄定着	優秀賞
08年度	㈲藤原牧場	宮崎県	肉用牛	地域資源活用型/低コスト肉用牛肥育経営～飼料価格高騰に対応するモデル的な取り組み～	最優秀賞
09年度	㈲金子ファーム	青森県	肉用牛	地域と共存した資源循環型大規模畜産への挑戦三方良し（消費者・生産者・地域社会）の商人道精神に根ざして	最優秀賞
13年度	村山昭雄 村山裕子	北海道	酪　農	苦農から酪農（楽農）への道のり～酪農歴50年を目指して～	最優秀賞
	佐藤宏弥 佐藤博子	茨城県	肉用牛	水田活用で広がるドリームファームの歩み～「常陸牛」率100％の一貫経営～	最優秀賞
14年度	長谷部将一	宮崎県	肉用牛	銘柄牛肉への取り組みと口蹄疫からの復興・再生	特別賞

畜産物需給見通し

牛枝肉

乳用・交雑種とも、急落はなく弱もちあいか

年末商戦は、前半は全品種で活発な動きを見せたが、後半はやや下降してきた。

年が明けて、乳用・交雑種ともに下降は続かず、この時期としては比較的安定した相場となっており、弱もちあいは予想されるが、急落はなさそう。

【乳去勢】12月の東京食肉市場の乳牛去勢Ｂ２の税込み枝肉平均単価（速報値）は、1217円（前年同月比153%）となり、前月より98円上がった。

１月初旬までは、Ｂ２で1100円台をキープしており、上昇は望めないが、もちあいが予想される。

【F_1去勢】12月の東京食肉市場の交雑種去勢の税込み枝肉平均単価は、Ｂ３が1644円（同100%）、Ｂ２が1495円（同103%）だった。前月に比べ、Ｂ３が71円、Ｂ２は52円ともに上昇した。

年末はやや下降傾向だったが、年明けはＢ３で1600円前後をキープしている。

【和去勢】12月の東京食肉市場の和牛去勢の税込み枝肉平均単価はＡ４が2463円（同102%）、Ａ３が2289円（同109%）だった。前月に比べ、Ａ４が114円、Ａ３は129円ともに上昇した。

年明けは、やや下降傾向の動きとなっており、今後も弱もちあいか。

【輸入量】農畜産業振興機構は１月の輸入量を総量で３万5500ｔ（同82%）と予測。内訳は、冷蔵品１万4300ｔ（同92%）、冷凍品が２万2120ｔ（同81%）。冷蔵・冷凍品ともに米国産が減少見込み。

【出荷頭数】１月の出荷頭数は、和牛３万7100頭（同94%）、交雑種２万1800頭（同109%）、乳用種２万3600頭（同94%）と、交雑種が前年を上回る出荷頭数となる見込み。

向こう１ヵ月の東京市場の税込み枝肉平均単価は、乳去勢Ｂ２が1050～1150円、F_1去勢Ｂ４が1600～1700円、同Ｂ３が1500～1600円、同Ｂ２が1400～1500円、和牛去勢Ａ４が2200～2300円、同Ａ３が2050～2150円での推移か。

12月の子牛取引状況

（頭、kg、円）

ブロック	品種	頭数 当月	頭数 前月	重量 当月	重量 前月	1頭当たり金額 当月	1頭当たり金額 前月	単価／kg 当月	単価／kg 前月
北海道	乳去	313	372	297	302	236,704	192,482	797	637
	F_1去	1,974	1,989	337	339	381,755	354,864	1,133	1,047
	和去	2,702	2,471	336	343	611,078	607,429	1,819	1,771
東北	乳去	3	－	204	－	2,933	－	14	－
	F_1去	1	1	298	366	211,200	215,600	709	589
	和去	2,562	2,434	321	320	621,872	560,656	1,938	1,752
関東	乳去	－	3	－	191	－	67,467	－	353
	F_1去	148	124	345	355	372,528	351,113	1,080	990
	和去	1,103	745	322	328	647,069	621,234	2,011	1,895
北陸	乳去	－	－	－	－	－	－	－	－
	F_1去	－	1	－	324	－	311,300	－	961
	和去	165	64	297	274	605,600	514,491	2,040	1,878
東海	乳去	－	－	－	－	－	－	－	－
	F_1去	52	54	328	328	389,294	359,211	1,187	1,096
	和去	266	468	271	283	647,669	629,019	2,393	2,223
近畿	乳去	－	－	－	－	－	－	－	－
	F_1去	－	－	－	－	－	－	－	－
	和去	432	423	263	270	1,078,639	1,039,133	4,106	3,846
中四国	乳去	1	6	309	334	135,300	157,116	438	470
	F_1去	252	234	332	340	401,395	356,602	1,210	1,049
	和去	1,091	668	308	314	609,341	592,520	1,981	1,885
九州・沖縄	乳去	－	－	－	－	－	－	－	－
	F_1去	316	338	326	332	394,232	363,108	1,208	1,093
	和去	8,733	11,027	297	297	582,011	538,091	1,957	1,810
全国	乳去	317	381	297	302	234,172	190,941	788	632
	F_1去	2,743	2,741	335	339	384,580	355,878	1,148	1,050
	和去	17,055	18,303	308	307	612,390	569,616	1,988	1,855

注：（独）農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。
価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。－は上場がなかったことを示す。
関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

豚枝肉

相場が低調な時期となり、年明けは弱もちあい

12月の東京食肉市場の豚枝肉税込み平均単価は、上物が637円（前年同月比115%）、中物は614円（同115%）となった。前月に比べ上物が66円、中物も51円それぞれ上がったが、最終週は500円台まで下降してきた。

年明けは上・中物で一時600円台に再浮上したが、２週目からは500円台での推移となっている。昨年もこの時期が底値となっており、出荷頭数も増加傾向にあるので、弱もちあいの展開が予想される。

農水省の肉豚生産出荷予測によると、１月は141万頭（前年同月比100%）と、ほぼ前年並み。猛暑の影響は少なくなっており、出荷頭数は徐々に増加する傾向にある。

農畜産業振興機構の需給予測によると、１月の輸入量は総量で７万6900ｔ（同107%）と、前年より増加する見込み。内訳は、冷蔵品３万2700ｔ（同94%）、冷凍品４万4200ｔ（同118%）。冷凍品は、価格優位性によるブラジル産などの輸入量の増加が見込まれる。

年明けの東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が470～570円、中物も450～550円と、弱もちあいの相場展開となるか。

素牛スモール

年が明け、スモール相場は下げ基調に

【スモール】12月の全国24市場の１頭当たり税込み平均価格（農畜産業振興機構調べ、月末の取引結果を除く暫定値）は、乳雄が２万2413円（前年同月比41%）、F_1（雄雌含む）は10万5694円（同147%）と、前月に比べ、乳雄は3521円増、F_1も１万7222円増と、ともに上昇した。

乳雄・F_1とも、年末に肥育出荷が多くなり、引き合いが強くなった。

年が明けると、北海道では乳雄で２万円を切る市場が出てきており、相場は全国的に下げ基調となってきたようだ。

【乳素牛】12月の乳素牛の全国１頭当たり税込み平均価格（**左表**、月末の取引結果を除く暫定値）は、乳去勢が23万4172円（同131%）、F_1去勢は38万4580円（同101%）だった。前月に比べ乳去勢は４万3231円増、F_1去勢も２万8702円上昇した。

乳去勢は、頭数の減少傾向が続き、枝肉相場と共にもちあいの展開が予想される。F_1去勢も枝肉相場が落ちないので、もちあいの展開か。

【和子牛】12月の和子牛去勢の全国１頭当たり税込み平均価格（同）は、61万2390円（同102%）で、前月より４万2774円急騰した。

年が明けると、肥育相場が一段落して弱もちあいが予想されるので、子牛相場も、下げ傾向に移ってくると見られる。